

## 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2838 号	氏名	高橋 健二郎
審 査 担 当 者	主 査	島 村 拓 司	(印)
	副主査	中 村 桂 郎	(印)
	副主査	大 島 孝 一	(印)
主論文題目： Neoplastic spindle cells are an independent prognostic factor in pancreatic cancer (癌紡錘形細胞は、膵癌の独立予後規定因子である)			

### 審査結果の要旨（意見）

膵臓癌は近年増加傾向にあり、早期から周囲に浸潤したり遠隔転移をきたしたりして極めて予後不良な悪性腫瘍である。たとえ外科的に根治術が施行できても術後の転移・再発には細心の注意を払って経過を観察しなくてはならない。この為、術後の再燃や予後を予測する因子が臨床の立場から求められてきた。本研究は、切除された 68 例の膵癌組織を用いた検討で、上皮間葉移行を示唆する紡錘形を呈する癌細胞の腫瘍組織に占める比率が高い症例ほど再発しやすく、また予後も不良であったことを明らかにしたものである。本研究の結果は、今後実際の臨床においても切除後の膵臓癌の再発や予後の新しい予測因子として利用できることを期待させるもので、極めて有用と評価できる。

審査に当たり、今後の展開、また研究内容に対する質問にも著者からの的確な回答が得られた。よって、この論文は十分に学位に値するものと考えられた。

### 論文要旨

癌間質部に紡錘形を呈した癌細胞がみられることがあり、EMT (Epithelial-mesenchymal transition) との関連が示唆されている。EMT は、胚上皮細胞が間葉系細胞の形質を得て細胞間移動する現象であり、癌細胞の転移・再発との関連がいられている。本研究では、膵癌の癌紡錘形細胞 (Neoplastic spindle cells (NSCs)) の臨床病理学的検討を行った。また、Snail、E-cadherin 免疫染色を行い、NSCs と EMT との関連も合わせて検討した。対象は、久留米大学病院で 2006 年 1 月～2012 年 12 月に根治切除を行った浸潤性膵管癌症例 68 例とした。

H&E 標本における NSCs 発現量ごとに 3 段階で評価した (NSC grade)。多変量解析の結果、NSC grade は全生存期間、無病生存期間の独立予後規定因子であった。次に Snail、E-cadherin 免疫染色を行い、NSCs と EMT との関連を検討した。NSCs は、管腔構造を呈する癌細胞群と比較して有意に核の Snail 陽性率が高く、E-cadherin 染色強度は、NSC grade と有意な逆相関関係を認め、EMT と深く関連していると考えられた。